

# 落第

夏目漱石

青空文庫



其頃東京には中学と云うものが一つしか無かった。学校の名もよくは覚えて居ないが、今の高等商業の横<sup>あた</sup>辺りに在<sup>あ</sup>つて、僕の入ったのは十二三の頃か知ら。何でも今の中学生などよりは余程<sup>よほど</sup>小さかった様な気がする。学校は正則と変則とに別れて居て、正則の方は一般の普通学をやり、変則の方では英語を重<sup>おも</sup>にやった。其頃変則の方には今度京都の文科大学の学長になつた狩野だの、岡田良平なども居つて、僕は正則の方に居たのだが、柳谷卯三郎、中川小十郎なども一緒だつた。で大学予備門（今の高等学校）へ入るには変則の方だと英語を余計やつて居たから容易に入れたけれど、正則の方では英語をやらなかつたから卒業して後更に英語を勉強しなければ予備門へは入れなかつたのである。面白くもないし、二三年で僕は此<sup>こ</sup>中学を止めて了<sup>しま</sup>つて、三島中洲先生の二松学舎へ転じたのであるが、其時分此<sup>こ</sup>処に居て今知られて居る人は京都大学の田島錦治、井上密などで、この間の戦争に露<sup>ロシ</sup>西亞へ捕虜になつて行つた内務省の小城なども居つたと思う。学舎の如<sup>ごと</sup>きは実に不完全なもので、講堂などの汚<sup>きた</sup>なさ<sup>きた</sup>と来たら今の人には逆<sup>とて</sup>も想像出来ない程だつた。真黒になつた腸<sup>はらわた</sup>の出<sup>た</sup>た<sup>み</sup>が敷<sup>た</sup>いてあつて机などは更<sup>そ</sup>にない。其<sup>そ</sup>処へ順序もなく坐り込んで講義を聞くのであつたが、輪講の時などは恰<sup>ちやうど</sup>度カルタでも取る様な工<sup>ぐ</sup>合<sup>あい</sup>にしてやつたものである。

輪講の順番を定めるには、竹筒たけづつばの中へ細長い札の入って居るのを振って、生徒は其中から一本宛抜すついてそれに書いてある番号で定めたものであるが、其番号は単に一二三とは書いてなくて、一東、二冬、三江、四支、五微、六魚、七虞、八齊、九佳、十灰と云つた様に何処迄も漢学的であつた。中には、一、二、三の数字を抜いて唯東、冬、江と韻許いんばかり書いてあるのもあつて、虞を取れば七番、微を取れば五番ということが直に分るのだから、それで定めるのもあつた。講義は朝の六時か七時頃から始めるので、往昔むかしの寺子屋を其儘そのまま、学校らしい処などはちつともなかつたが、其頃は又寄宿料等も極めて廉く——僕は家から通つて居たけれど——慥たしか一カ月二円位だつたと覚えて居る。

元来僕は漢学が好で随分興味を有つて漢籍は沢山たくさん読んだものである。今は英文学などをやって居るが、其頃は英語と来たら大嫌だいきらいで手に取るのも厭いやな様な気がした。兄が英語をやつて居たから家では少し宛教すつえられたけれど、教える兄は癩癩かんしゃくもち持、教わる僕は大嫌いと来て居るから到底とうてい長く続く筈はずもなく、ナシヨナルの二位でお終しまいになつて了しまたが、考えて見ると漢籍許ばかり読んでこの文明開化の世の中に漢学者になつた処が仕方なし、別に之これと云う目的があつた訳でもなかつたけれど、此儘このままで過つごすのは充つまらないと思う処から、兎とに角かく大学へ入つて何か勉強しようと決心した。其頃地方には各県に一つ宛位中学

校があつて、之を卒業して来た者は殆んど無試験で大学予備門へ入れたものであるが、東京には一つしか中学はなし、それに変則の方をやつた者は容易に入れたけれど、正則の方をやつたものだと更に英語をやらなければならぬので、予備門へ入るものは多く成立学舎、共立学舎、進文学舎、——之は坪内さんなどがやって居たので本郷壹岐殿坂の上あたりにあつた——其他之に類する二三の予備校で入学試験の準備をしたものである。其処で僕も大いに発心して大学予備門へ入る為に成立学舎——駿河台にあつたが、慥か今の蘇我祐準の隣だつたと思う——へ入学して、殆んど一年許り一生懸命に英語を勉強した。ナシヨナルの二位しか読めないのが急に上の級へ入つて、頭からスウキントンの万国史などを讀んだので、初めの中は少しも分らなかつたが、其時は好な漢籍さえ一冊残らず売つて了い夢中になつて勉強したから、終にはだんだん分る様になつて、其年（明治十七年）の夏は運よく大学予備門へ入ることが出来た。同じ中学に居つても狩野、岡田などは変則の方に居たから早く予備門へ入つて進んで行つたのだが、僕などが予備門へ入るとしては二松学舎や成立学舎などにまごついて居た丈遅れたのである。

何とか彼んとかして予備門へ入るには入つたが、惰けて居るのは甚だ好きで少しも勉強なんかしなかつた。水野鍊太郎、今美術学校の校長をして居る正木直彦、芳賀矢一なども

同じ級クラスだったが、是等これらは皆な勉強家で、自ら僕等おのずかの怠け者なまの仲間とは違つて居て、其間に懸隔けんかくがあつたから、更に近づいて交際する様なこともなく全然まるで離れて居つたので、彼方むこうでも僕等の様な怠け者の連中は駄目な奴等だと軽蔑けいべつして居たろうと思うが、此方こちらでも亦試験の点許り取りたがつて居る様な連中は共に談ずるに足らずと観じて、僕等は唯遊んで居るのを豪えらいことの如く思つて怠けて居たものである。予備門は五年で、其中に予科が三年本科が二年となつて居た。予科では中学へ毛の生えた様なことをするので、数学なども随分沢山たくさんあり、生理学だの動物植物鉱物など皆な英語の本でやつたものである。だから読む方の力は今の人達より進んで居た様に思われるが、然し生徒の氣風に至つては実に乱暴なもので、それから見ると今の生徒は非常に温順おとなしい。皆な悪戯いたずらばか許りして居たものでストゥヴ攻せめなどと云つて、教室の教師の傍にあるストゥヴへ薪まきを一杯くべ、ストゥヴが真赤になると共に漢学の先生などの真面目まじめな顔が熱いので矢張りストゥヴの如く真赤になるのを見て、クスクス笑つて喜んで居た。数学の先生がボードに向つて一生懸命説明して居ると、後から白墨チヨークを以つて其背中へ怪しげな字や絵を描いたり、又授業の始まる前に悉く教室の窓を閉めて真暗な処に静まり返つて居て、入つて来る先生を驚かしたり、そんなこと許り嬉はかしがつて居た。予科の方は三級、二級、一級となつて居て、最初の三級は平

均点の六十五点も貰<sup>もら</sup>つてやつとこき通るには通つたが、矢張り怠<sup>なま</sup>けて居るから何にも出来ない。恰<sup>ちやうど</sup>度僕が二級の時に工部大学と外国語学校が予備門へ合併したので、学校は非常にゴタゴタして随分大騒ぎだった。それがだんだん進歩して現今の高等学校になったのであるが、僕は其時腹膜炎をやつて遂<sup>とうとう</sup>々二級の学年試験を受けることが出来なかつた。追試験を願<sup>ねが</sup>つたけれど、合併の混雑やなんかで忙しかつたと見え、教務係の人は少しも取合<sup>くく</sup>つて呉れないので、其<sup>そこ</sup>処で僕は大いに考えたのである。学課の方はちつとも出来ないし、教務係の人が追試験を受けさせて呉れないのも、忙しい為もあるうが、第一自分に信用がないからだ。信用がなければ、世の中へ立つた処で何事も出来ないから、先<sup>ま</sup>ず人の信用を得なければならぬ。信用を得るには何<sup>ど</sup>うしても勉強する必要がある。と、こう考えたので、今迄の様にうっかりして居ては駄目だから、寧<sup>いっ</sup>ろ初めからやり直した方がいいと思つて、友達などが待つて居て追試験を受けると切<sup>しき</sup>りに勧<sup>すす</sup>めるのも聞かず、自分から落第して再び二級を繰<sup>くりかえ</sup>返すことにしたのである。人間と云うものは考え直すと妙なもので、真<sup>ま</sup>面目<sup>め</sup>になつて勉強すれば、今迄少しも分らなかつたものも瞭<sup>はつきり</sup>然と分る様になる。前には出来なかつた数学なども非常に出来る様になつて、一<sup>あるひ</sup>日親睦<sup>しんぼく</sup>会の席上で誰は何科へ行くだろう誰は何科へ行くだろうと投票をした時に、僕は理科へ行く者として投票された位であ

つた。元来僕は訥<sup>とつべん</sup>弁<sup>べん</sup>で自分の思つて居ることが云えない性<sup>たち</sup>だから、英語などを訳しても分つて居<sup>いな</sup>乍<sup>な</sup>らそれを云うことが出来ない。けれども考えて見ると分つて居ることが云えないと云う訳はないのだから、何でも思い切つて云うに限ると決心して、其後は拙<sup>ます</sup>くても構わずどしどし云う様にすると、今迄は教場などで云えなかつたこともずんずん云うことが出来る。こんな風に落第を機としていろんな改革をして勉強したのであるが、僕の一身にとつて此落第は非常に葉<sup>は</sup>になつた様に思われる。若<sup>も</sup>し其時落第せず、唯誤<sup>ご</sup>魔<sup>ま</sup>化<sup>か</sup>して許<sup>ば</sup>り通つて来たら今頃は何<sup>ど</sup>んな者になつて居たか知れないと思う。

前に云つた様に自<sup>み</sup>ら落第<sup>ずか</sup>して二級を繰返し、そして一級へ移つたのであるが、一級になるともう専門に依つてやるものも違うので、僕は二部の仏蘭西語<sup>フランス</sup>を扱<sup>えら</sup>んだ。二部は工科で僕は又建築科を扱<sup>えら</sup>んだがその主意が中々面白い。子供心に異<sup>おつ</sup>なことを考えたもので、其主意と云うのは先<sup>ま</sup>ずこうである。自分は元来変人だから、此<sup>この</sup>儘<sup>まま</sup>では世の中に容<sup>い</sup>れられない。世の中に立つてやつて行くには何<sup>ど</sup>うしても根<sup>こん</sup>柢<sup>てい</sup>から之<sup>これ</sup>を改めなければならぬが、職業を扱<sup>えら</sup>んで日常欠<sup>く</sup>可<sup>べ</sup>からざる必要な仕事をすれば、強<sup>し</sup>いて変人を改めずにやつて行くことが出来る。此<sup>この</sup>方<sup>ちやう</sup>が変人でも是非やつて貰<sup>もら</sup>わなければならぬ仕事さえして居れば、自然と人が頭を下げて頼みに来るに違<sup>ちが</sup>いない。そうすれば飯<sup>い</sup>の喰<sup>く</sup>外<sup>はぐ</sup>れはないから安心だと云う

のが、建築科を択んだ一つの理由。それと元来僕は美術的なことが好であるから、実用と共に建築を美術的にして見ようと思つたのが、もう一つの理由であつた。僕は落第したのだから水野、正木などの連中は一つ先へ進んで行つて了つたのであるが、僕の残つた級クラスには松本亦太郎なども居つて、それに文学士で死んだ米山と云う男が居つた。之は非常な秀才で哲学科に居たが、大分懇意にして居たので僕の建築科に居るのを見て切りに忠告して呉れた。僕は其頃ピラミッドでも建てる様な心算つもりで居たのであるが、米山は中々盛んなことを云うて、君は建築をやると云うが、今の日本の有様では君の思つて居る様な美術的の建築をして後代に遺すのこなどと云うことは逆も不可能な話だ、それよりも文学をやれ、文学ならば勉強次第で幾百年幾千年の後に伝える可べき大作も出来るじゃないか。と米山はこう云うのである。僕の建築科を択んだのは自分一身の利害から打算したのであるが、米山の論は天下を標準として居るのだ。こう云われて見ると成程なるほどそうだと思われるので、又決心を為直しなおして、僕は文学をやることに定めたのであるが、国文や漢文なら別に研究する必要もない様な気がしたから、其処そこで英文学を専攻することにした。其後は変化もなく今日迄やつて来て居るが、やつて見れば余り面白くもないので、此頃は又、商売替をしたいと思ふけれど、今じゃもう仕方がない。初めは随分突飛なことを考えて居たもので、英文学

を研究して英文で大文学を書こうなどと考えて居たんだが……。

## 青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

1972（昭和47）年1月10日第1刷発行

初出：「中学文芸」

1906（明治39）年9月15日

※底本は、本作品を「談話」の項におさめている。

入力：Nana ohbe

校正：米田進

2002年5月10日作成

2003年5月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 落第

夏目漱石

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>